中国の戸惑いと東アジア情勢への影響

川島真
(東京大学)

「ウクライナ」をめぐる中国の戸惑い

- ⑴ 米中「競争」＋コロナ禍　→ すでに強まる警戒感
- 　　国境警備などは以前以上に敏感：中印国境、台湾海峡
- ⑵ ロシアのウクライナ侵攻
- 　① 2022年は「人事の年」（失敗できない、否定できない）
- 　② 中国の外交原則（平和友好５原則・独立自主）
- 　③ 習近平政権の外交政策
- 　　（2049年まで対米関係が基軸＋対立構造は先進国vs新興国＋開発途上国）
- 　　ロシアは（対米戦略上）大切なパートナー国、しかし同盟国でない
- 　→ロシア寄りでも、「中露一枚岩」ということではない。
- ⑶ ウクライナと台湾との同一視：台湾社会とも異なる先進国の反応
- ⑷ 中国国内では国際社会での「孤立」、台湾問題などでの「危機感」が強まる。

「ウクライナ」から学ぶ中国

- ⑴ 圧倒的軍事力でも、陸路でも難しい「勝利」
- 　　中国は台湾を統一するだけの軍事力（ミサイル攻撃＋揚陸艇）
- ⑵ 事前の「内部浸透」の重要性
- 　　クリミアの時の成功
- ⑶ トップに上がる情報の偏向の生み出す問題
- ⑷ 国際社会からの制裁、また被侵略国が獲得する外交空間

- → 台湾に適用した場合、どうなるのか？
- 　　統一するだけの軍事力（それを台湾に見せつける）＋内部浸透＋経済制裁
- 　→ 台湾の人々に独立、現状維持を諦めさせ、統一に向かわせる（第一段階）

思想・情緒＋安全保障の時代へ

- ⑴ 米中「競争」＋コロナ禍＋ウクライナ
- → 東北アジアは全体として安全保障の時代
- 政治外交（20世紀前半から冷戦）→ 経済（1980年代以降）
- → 思想・情緒（21世紀）＋安全保障

- ⑵ 経済発展そのものを目指している地域を対象とする地域研究
- → その「生活」そのものへの関心を維持しながらも、「安全」が重視される社会、対外政策などをいかに研究していくか。しかし、その研究そのものが安全に関わるものとされる。

中国研究の「苦衷」

- ⑴中国国内での学術のありよう
- 習近平政権下での「学術」に対する管理統制強化
- ＋　科学技術大国に向かうための巨額投資
- 学術情報（ビックデータ）の整備＋管理統制の強化
- 大学内での授業の「透明化」と教員の授業内容への「監視」
- ⑵ 2019年、北大教授拘束問題
- → それまで尾行などされていた研究者は渡航不能に
- 中国に行かずに中国研究するということ（1970年代以前に回帰？）
- → 行けるにしても調査活動などは大幅に抑制。
- （シャープパワー：中国の日本研究者は日本で調査可能）
- → 中国での学術報告（事前検閲）、出版（事前検閲）などの抑制
- ⑶ 中国の学生、日本に来ている中国人留学生に対する管理統制の強化
- 「青年を共産党の理論で武装する」